広島市医師会

健康メモ

整形外科の視診・問診の重要性

広島市医師会会長
平松整形外科病院理事長　平松　恵一

医師と患者さんとの最初の出会いである診察室で、私達医師は入って来られる患者さんを幾分想像をしながら待ち受けます。

ドアを開けて入って来られる歩容を含めた姿勢を見て、おおよその運動能力を判断し、更に椅子への座り方、ベッドへの移動の仕方、上衣の脱ぎ方などからも骨関節・筋疾患か神経性疾患か部位判断をします。次に問診に入ります。主訴として患者さんの訴えを聞きます。交わす言葉のやり取りから中枢神経性か否かも判断します。患者さんが現在最も困っていることを把握し、その発症の詳細を聞き取ります。外傷性か非外傷性か、そして発熱や熱感の有無により感染性か非感染性かを見極めます。次いで、既往歴として過去に経験した病気の有無を聞きます。ここまでで大抵の病気を想定することができます。

というわけで、受診される場合は、現在の症状を発症の始めから個条書きにしたり、これまでかかった病気のメモを用意していただければ、と思います。

患者さんが高齢で意志の疎通がとりにくい場合には家族の方にメモを用意していただくと診察がスムースになります。

さて、整形外科疾患に限っての問診で重要な点は、「痛み」における安静時痛、特に夜間痛の存在です。夜間痛の存在は炎症や腫瘍、とりわけ腰背痛であれば内臓疾患も疑われます。そして、問診で忘れてならないのは薬剤使用歴です。最近は脳梗塞や心筋梗塞の治療で血液をサラサラにするクスリを飲まれている方や糖尿病で血糖値が高い方も多く手術を延期せざるを得ないケースが多く見受けられます。服用薬剤を必ず病医院や薬局でもらって用意していただきたいと思います。

このように、診察室においては次の触診に移るまでに患者さんから多くの情報を得ます。その上に触診、様々な他覚的検査、血液検査、レントゲン、MRI、CT等々の諸検査により疾病の診断が確立されてゆきます。

診察室では患者さんは、どうかくつろいで、以上のような心の準備、メモの準備をされてありのままの姿を私達に見せていただきたいと思います。

マイシティ　マイドクター
広島市医師会
www.city.hiroshima.med.or.jp